

## 清纯（風）お嬢様の悪臭フルコース

唐突だが、好きな相手に告白するというのは非常に勇気の求められる行為である。両思いであるという確証がない場合、相手に断られる事も覚悟しなければならない。その覚悟があつてこそ、相手にきちんと愛の告白をする事ができるのだ。

前置きが長くなったが、何が言いたいのかといえば――

「俺と付き合ってください！」

俺、<sup>みどりかわ</sup>緑川サトルは現在進行形でその勇気の求められる行為をしているという事だ。場所は放課後、人気のない学校の屋上。

相手は俺と同じ2年生のエルゼ・シュミット。

外国人の父親を持つハーフで、銀髪碧眼、どこか高貴さを感じさせる大人びた顔立ちの美少女だ。

その美しさは一部の男子の間で「女神」と称されているほどである。

俺はそんな彼女に告白をした。

理由は、ただ1つ。

エルゼ・シュミットという少女が俺にとって理想の異性だったという事だ。

どんな人にも「理想の異性」のイメージがあると思う。

俺の場合、そのイメージが彼女の容姿と完全に一致したのだ。

とはいえ、クラスでも目立たない方である俺が、高嶺の花である彼女に告白するというのは無謀だった。

「ごめんなさい」

結果は言うまでもなく玉砕。

「そう、だよな・・・」

（もっと段取りを踏むべきだった・・・）

いまさら後悔しても遅いが、我ながら早まった事をしたものだ。

取り敢えず、俺に「当たって砕けろ」と唆したカズマだけは思い切りぶん殴ろうと思う。

「シュミットなら沢山の男子から告白されてるだろうし、俺みたいな奴じゃダメだよな・・・」

そう言って、俺はエルゼに背を向けて歩き出す。

だが、

「待ってください」

何歩か進んだところで、エルゼに呼び止められた。

「・・・」

気は進まなかったが、仕方なく足を止めて彼女の方へと向き直る。

「勘違いされてるようなので言っておきますが、これまで私に告白してくれたのは緑川君

が初めてですよ？」

「へえ、そうなのか・・・」

俺は力なく応じる。

どうやら彼女のような高嶺の花に告白するようなバカは、俺しかいなかったようだ。

「それから、私が『ごめんなさい』と言ったのは、あなたがダメだからという訳ではないんです。むしろ、どちらかといえば、緑川君は好みのタイプですよ」

「なっ!？」

エルゼの口から出た言葉に、俺は驚きの声を上げた。

俺がエルゼの、好みの、タイプ・・・？

「あっ、好みのタイプなら、どうして告白を断ったんだって顔をしていますね」

エルゼが少し可笑しそうに言う。

「う～ん、そうですね。緑川君は初めて告白してくれた人ですし、特別に教えてあげます」

そう言いながら、エルゼが俺のすぐ目の前まで歩み寄ってきた。

そのまま女神のように整った顔を、そっと俺の耳元に寄せてくる。

「私が断ったのは————からなんです」

「なっ!？」

エルゼの耳元での囁きに、俺は2度目の驚きの声を上げた。

今の話は、本当なのか？

いや、そんなはずが・・・。

「緑川君は本当にわかりやすいですね。信じられないって顔に書いてありますよ」

また可笑しそうに言って、エルゼが人差し指で俺の鼻先に触れた。

「っ!？」

たったそれだけの事で、顔が真っ赤になって熱を帯び、鼓動が早鐘のように高鳴る。

「百聞は一見に如かずと言いますし、実際にお見せしましょう」

そう言うと、エルゼは俺から1 mほど離れ、くると反転して俺に背を向けた。

「んっ」

彼女が上体を軽く前に倒して小さく声を漏らした直後、

**ばっふうううううううううっ!!**

大音量の爆音が屋上に響き渡った。

「っ!？」

一瞬、俺は自分の耳を疑った。

だが、今の音は間違いなくエルゼのスカートの中から聞こえてきた。

それを裏付けるように、俺の鼻には大量のキャベツを腐らせたような悪臭においが襲い掛かってきている。

つまり、今の音は紛れもなく――

「これで信じてもらえましたか？」

エルゼが肩越しに俺の事を見ながら問い掛けてくる。

「・・・」

どうやら信じるしかないようだ。

『私が断ったのはオナラがとっても臭いからなんです』

先程、彼女が俺の耳元で囁いた言葉を。

「この悪臭で相手の方に迷惑を掛けたくないの、私は誰とも付き合わない事にしてるんです」

そう告げて、エルゼが寂しげな表情を浮かべる。

しかし、

「オ、オナラなんて臭くて当たり前だろ？そんな事で、誰とも付き合わないなんて言うなよ」

俺はオナラの悪臭ぐらいで、エルゼの事を嫌ったりはしない。

少しぐらいオナラが臭くても、彼女は俺にとって「理想の異性」なのだ。

「・・・優しいですね。では、こうしましょう」

エルゼの視線が真っ直ぐに俺を射抜く。

「緑川君が私のオナラに耐えられたら、彼女になってあげてもいいですよ」

彼女の口から出た提案に、俺は一瞬の躊躇いもなく頷く。

この時、彼女の口角がわずかに持ち上がっていた事に、俺は気付かなかった。

\*

5分後。

俺たちは屋上の出入り口から死角になる位置へと移動していた。

現在、開脚状態に座っている俺の前で、エルゼは俺の方へ尻を突き出しながらスカートをたくし上げている。

(これが、エルゼの・・・)

意図せずして、ごくりと喉が鳴る。

エルゼの腰周りを覆っていたのは、白いブルマのようなショーツだった。

どちらかといえば体操服のような感じだが、丸見えになったヒップラインと突き立ての餅のような白い太腿が目眩しい。

「では、始めますね」

そう言うと、

むにゅっ。

中腰になったエルゼが俺の顔に尻を押し付けてくる。

ちょうどエルゼが俺の顔面に腰掛けているような状態だ。

顔面に感じる柔らかな感触が天にも昇るような心地よさを与えてくれる。

「ギブアップする時は言ってくださいね」

ギブアップなどする訳がない。

少しぐらい臭くても、この——

「むぐっ!？」

鼻から息を吸った瞬間、俺の夢見心地はあっという間に終焉を迎えた。

臭い。

とにかく臭い。

ブルマ型のショーツに染み込んだ汗の臭いと、先程のオナラの残り香。

それらが渾然一体となって、俺の鼻に襲い掛かってきたのだ。

「行きますよ・・・んっ♪」

**ブボボボボオオオオオオオオーツツ！！**

俺の苦悶の声を無視して、エルゼが1発目のオナラを放つ。

「むぐううううううっ!？」

拡散していない濃密な臭気が一気に鼻の中へ流れ込んでくる。

キャベツと卵を纏めて腐らせたような強烈な腐敗臭に、俺は再び苦悶の声を上げる。

だが、耐え切った。

これでエルゼは彼女になって・・・。

「1発目はちゃんと耐えられましたね。その調子で頑張ってくださいね」

「っ!？」

(1発だけじゃないのか!?)

「2発目です♪」

**ブブブブブブウウウウーツツ！！**

何処か楽しげにエルゼが2発目のオナラを放つ。

「んむううううううっ!？」

鼻を襲う悪臭においがその濃さを増し、視界が黒ずんだ黄色に染まる。

それでも俺はエルゼの尻から顔を離さない。

いや、顔を離せない。

エルゼのオナラ 2 連発を浴びた俺には、顔に押し付けられたエルゼの尻を振り払うだけの力が残されていないのだ。

「んっ♪」

**ブビビビビイイイイイイイイ〜〜ツツ！！**

3 発目のオナラは豚の鳴き声のようなオナラだった。

「—————！？」

もはや声を上げる事もできない。

たかがオナラと考えたのが間違いだった。

この悪臭は彼女の言う通り、いや、それ以上に凶悪だ。

とはいえ、さすがにこれだけのオナラを 3 発も出せば、もうエルゼもオナラは出せないだろう。

「私のオナラを 3 発も耐えるなんて凄いですね」

そう言いながら、エルゼが俺の顔から尻を離した。

やはり、今の 3 発で終わりのようだ。

「第 1 段階は合格です。第 2 段階にも挑戦しますか？」

「っ！？」

エルゼから投げ掛けられた言葉に、俺は絶句する。

あれほど強烈なオナラがまだ第 1 段階だということのか？

「♪〜♪〜」

俺の無言を肯定と受け取ったのか、エルゼがさらに驚くべき行動に出た。

何と自らの尻を包んでいたブルマ型のショーツを脱ぎ始めたのだ。

しかし、その下に現れたものは、俺の想像とは少し違っていた。

「驚きましたか？私はオナラの悪臭を防ぐために、いつもカバー用の下着を着けてるんです」

そう、彼女が脱いだブルマ型のショーツの下には、もう 1 枚の別のショーツがあったのだ。

細かいレースと刺繍で華やかに彩られた、純白の薄布。

しかも、尻の部分は細い Tバックになっている。

そこまで認識したところで、

**むにゅっ。**

エルゼの尻が再び俺の顔に押し付けられた。

「んっ♪」



「ここからは罰ゲームです。んっ♪」

シュオオオオオオオオ・・・。

「~~~~~!？」

今までとは打って変わって、殆ど音のしないすかしっ屁が鼻の中に流れ込んでくる。

もはや動く事もままならない身体がビクビクと痙攣する。

オナラのにおい悪臭で死んだという話は聞かないが、このオナラなら本当に死んでしまうかもしれない。

「んっ♪」

ムシュウウウウウウ・・・。

楽しげに2発目のすかしっ屁を浴びせてくるエルゼ。

「・・・」

俺はもう反応する事すらできない。

たった今、俺は確信した。

彼女は決して「女神」などではない。

彼女は悪魔だ。

それも天使を装った、タチの悪い悪魔だ。

「これで最後ですっ♪」

フシュウウウウウウ・・・。

3発目のすかしっ屁を放ったところで、ようやくエルゼは俺の顔の上から立ち上がった。

「まあ、頑張った方ですけど、私と付き合うにはまだまだですね。次はもっと頑張ってください♪」

エルゼはブルマ型のショーツを穿き直すと、倒れたままの俺を残して屋上から去っていった。

続